

親父のヘソクリ

昭和四十一年二月父文一郎が亡くなった。村田に入院していたが前日まで元気だったのに、朝方早く電話あり、二人でまだ暗く足跡の無い雪の菅生街道を通り駆けつけたが、死に目に会えなかった。数え歳七十五才。

父は山歩きが好きで、狩猟の鉄砲撃ちは毎年欠かさず出掛けていたし、春のわらび、ぜんまい取り、秋のキノコ取り、山芋掘り等、山に一人で出掛けるのが好きだった様だ。

家庭での金銭の出し入れは、主婦が多いと思う。即ち財布持ちと言つて、主婦が実権を握つて居る家庭が半数以上あると思われるが、我が家の父は母に小遣い以外お金を渡さず、ワンマンで、私達兄弟の小遣いは父から貰つていた。

生家の道路沿いには、きれいな用水が流れていて、よく鰻や蟹が獲れる。親父は鰻獲りがうまい。

又田圃に鱧（ドジョウ）獲りの仕掛けをする。大雨の夜が多く獲れるので。大雨が降ると蓑合羽でイソイソと（どう）を担いで喜んで出掛ける。翌朝早く起きて回収に行くが、田圃までは十分はかかる。好きだから骨身は惜しまない。

鱧は少なくとも二・三升は獲つてくる。獲つてくると、必ずと云つていい位、その時の村長さんに、一升位届ける。円田小学校の裏の方にあり、通学の途中届けさせられた。

届けると必ず五〇銭銀貨をくれる。お祭りの小遣いが五銭か十銭の時代だから、五〇銭は大金であった。学校から帰つて父に貰つたお金を渡すが、一銭もくれない。

私が船員時代、生家の隣、一屋敷を二〇万円で購入して、持っていた。屋敷の周りには杉の大木が生えていて、私が休暇で帰つて見ると、必ず一・二本切り株になっている。

父に聞くと、小使いに貰つて売つたと云う。一抱えもある大木だから一本一百万円位だろうと近所に人々が言つていた。私が持ち主の間、十本位売つたと思う。

屋敷を欲しいと云う人が居るから、売つてもいいかと父より話があり、承諾した。何ヶ月後に売つたお金だと、二〇万円寄こしたが、最近になつて、買ったのは同級生だったので聞いたら、四十五万円払いましたよ、ということを書いて呆れた。兄弟で一番親孝行したのだと思いを改めた。

それまでにして貯めたお金は、インキチ会社に投資して失つてしまった。その後余り使わない土地などを売つて、いくらかは持つていたようだが、詳しい事は判らない。

親父の葬式も終わり、兄弟に母を交え、父はお金をどうしたのだろうと話題になつた。父の身辺には殆ど無い。

家中皆で探し回つた、何処かに隠してある筈だ。何日か探したが見つからない。誰だか記憶に無いが、とうとう見つけた。馬小屋の中は草や糞でゴジャゴジャ、それに臭くて暗い。馬はオトナシイが誰も中に入らない。周りの壁が傷まない様に厚い板が透かしに張つてある。その板と壁の間に吊つて隠してあつた。

開けて見ると大金ではない、こんな半端な額でない筈だと集議一決したが、諦める他ない。

風評で白石の知人に預けてあるの、また仙台向山の銀行に預金しているとかが聞こえてきたが、調べようが無い。

私は念の為、向山の銀行に行つて聞いたが、石で鼻をかむ返事だつた。あれから三十六年経つ、一度投資に失敗した親父だからどんな方法で隠したのだろう。それとも馬小屋で見つけただけだつたのか、遠い昔の夢物語である。